

地域情報（県別）

【奈良】文芸学部と連携しホスピタルアート導入。総合大学の強みを発揮-近畿大学奈良病院に聞く◆Vol.1

2021年4月16日（金）配信 m3.com地域版

奈良県生駒市にある近畿大学奈良病院は、開設者が総合大学であるという特徴を強みとして、療養環境の改善に生かしている。一つは、文芸学部との連携によるホスピタルアートの導入。もう一つは、病院食の満足度向上の取り組みにおける、農学部との連携である。連載1回目は、ホスピタルアートの取り組みについて紹介する。（2021年2月15日、4月7日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)（近日公開）



小児科病棟処置室の壁に描かれたホスピタルアート。森と戯れる動物たち

近畿大学は大阪府東大阪市を拠点とする西日本最大級の総合大学。医学から文化芸術まで14学部48学科を擁する。近畿大学奈良病院は1999年に開設され、病床数は518床。診療科の数は32に及び、多様な疾患に対応している。県の二次医療圏の一つ、西和医療圏において中核的な役割を担う。

ホスピタルアートとは、病院などに、より快適な療養環境を創出するアートやデザインそのもの、またはその概念をいう。近畿大学奈良病院は文芸学部の文化デザイン学科などとの連携により、治療室やフロアに心とむデザインを取り入れたり、学生らが企画したイベントで入院患者に明るく過ごしてもらおう機会を提供したりしている。

子供が怖がらない小児科処置室に変身

ホスピタルアート導入のきっかけは2015年、障害を持つアーティストとともに開いたイベント「HART（ハート）フェスティバルいこま」。患者らがアート作品や詩の朗読、歌を楽しんだ。好評を呼び、行事は学生らの企画で年2回、定期的にかかれるようになった。同時期に文芸学部の森口ゆたか教授が専門のホスピタルアートの授業を開始。授業にホスピタルアートによる病院の療養環境の改善を取り上げた。

小児病棟の処置室に入ると、絵本の絵に囲まれているような空間が現れる。四方の壁一面に、森の中でシカやサル、キツネなどの動物たちが戯れる様子がシルエットで幻想的に描かれていて、空想を膨らませることができる。

このデザインは2019年8月に施された。処置室では、ときに侵襲を伴うような治療を受けなくてはならず、看護師から「子供が入るのを怖がる」などの声があった。処置室には母親も入れず、子供は不安になるという。デザインには、そうした子供たちの気持ちを少しでも和らげることができればとの思いを込めた。

デザイン学ぶ学生が医師や看護師にプレゼン

ホスピタルアートを取り入れる病院は増えつつあるが、この病院では、同じ大学の文芸学部文化デザイン学科という、芸術文化の力で社会的課題を解決することを学んでいる学生たちが取り組んだ。学生たちは、現場の医師や看護師から意見を聞くため、何度も病院に足を運び、3つのグループに分かれてデザインを提案。医師や看護師を前に行われたプレゼンテーションを経てデザインが決定された。

デザインには若者らしい発想が反映された。装飾は床面にも及び、タヌキやシカの足跡をたどっていくと処置ベッドに至る。より子供の年齢に近い、学生たちが子供の気持ちを想像した。指導に当たった森口教授はそう評価する。

参加した文芸学部文化デザイン学科2年生（当時）の岡田海渡さんが病院広報誌「いこま」に感想を寄せた。「装飾後のアンケートで、侵襲を伴う処置を怖がって泣き出す子は多数いるものの、処置室に入るのをとまどう子は以前と比べて減っていたので安心しました」

実施に当たっては、「富士フィルム イメージングシステムズ」が壁紙の提供から施工まで全面的に協力した。同社は商業施設や公共施設の大型の壁面広告や案内標識などのフロアサインを手掛けており、その一環で癒しを狙いとった院内装飾も手掛けている。

病院と駐車場をつなぐ地下道が元気の出る空間に



奈良県の名物などのイラストが添えられたフロアサイン

病院が学生たちと共に次に取り組んだのはフロアサイン（床に張る案内標識）。「清潔感あふれるシンメトリー（対称）」の特徴ある病棟建物に対しては、一方で「どこも似ていて」場所を識別しにくいという患者らの声もあった。

多くの人の目に触れる場所だけに、ただ案内をするのみではなく、ここにもホスピタルアートの発想を取り入れた。縦60センチ、横30センチのフロアサインには、東大寺の大仏や奈良公園の鹿のほか近大マグロなど、奈良県や大学にゆかりのある物のイラストが添えられた。



暗い地下道の壁を飾る絵

最も新しい取り組みは、駐車場と病院入り口をつなぐ地下道の壁画。2020年11月に完成した。地下道の左右両側の壁面に学生たちが直接筆を振った。長さ30メートルに及ぶ大作。デザインは、小児病棟処置室と同様、医師や看護師、事務職員らの意見を踏まえて決定された。

描かれているのは、現在のコロナ禍を念頭に、今は雨が降っているがやがて虹が架かるということを空想したものだ。躍動感のある絵に、患者からは「陰気な通路が華やかになった」、職員からも「元気がもらえる」と反響がある。



文化デザイン学科の学生たちと森口ゆたか教授（右端、本人提供）

医学部2年次にホスピタルアート授業

医学部の授業にもホスピタルアートの取り組みは及ぶ。年に1度、2年生を対象にしたプロフェッショナル実習で90分の授業を行っている。授業を担当する森口教授によると、学生からは「アートに対する考え方、医療に対する考え方が変わった」などの感想もあり好評という。

ホスピタルアートの導入を事務局の立場で支えてきた患者支援センターの田花永久課長（職名は取材当時、現在は近畿大学運営本部和歌山キャンパス学生センター課長）はその効果について語る。「子供が処置室に入ってくれず泣いてしまう。それは医療者にとってもつらい。同じ医療を行うにしても子供が喜ぶ空間で、というのが医療者の気持ち」「患者さんがフェスティバルに参加してこんなことをしたと医師に告げる。医師は患者とのコミュニケーションが取りやすくなったと言っている」

地下道の壁画のデザインには「賛否両論ある」という。歓迎する声の一方で、「色がきつすぎる」、描かれている人の顔が「怖い」という反応も聞こえてきた。デザインは医師、看護師、事務職員ら現場代表の意見を聞いて決めたが、その機会がなかった看護師からは「事前に意見を聞いてほしかった」の声。田花課長は、もっと広く相談しながら進めたら良かったと振り返る。今後の課題になった。

ホスピタルアートはいろいろな部分に広げられる可能性がある。例えば殺風景なスタッフ通路。田花課長は「スタッフの気持ちが沈めば、患者さんにも影響が出る」と話す。

【取材・文・撮影＝浅野善一】

→ 奈良県に関する他のニュースを見る

[三重県](#)

[滋賀県](#)

[京都府](#)

[大阪府](#)

[兵庫県](#)

[奈良県](#)

[和歌山県](#)

奈良県に関連するニュース

[奈良、確保要請で33床追加 まん延防止適用に知事慎重](#)

4月21日

[新型コロナ：新型コロナ 感染の拡大なぜ？ 県庁でクラスター 「入室禁止」の紙も /奈良](#)

4月18日

[奈良県、病床確保を要請 改正感染症法で全国初](#)

4月15日

[新型コロナ：新型コロナ 専用病床、民間に要請へ 奈良県が法に基づき](#)

4月15日

[多剤耐性菌：耐性菌「OXA48型」検出 薬ほぼ効かず 県内初、全国でもまれ /奈良](#)

4月10日

記事検索

ニュース・医療維新を検索

